

などの事業に湛能な多くの専門家や労働者が集められ
ウルバンツェフは雑事からほとんど解放されて 思うが
ままに調査・探鉱の分野で腕がふるえるようになったの
である。総勢 実に150名。以上の措置が今日のノ
リリスクを生む一大転機となった といっても言いすぎ
ではあるまい。

新 鉱 床 の 発 見

1925年の夏に始まった調査・探鉱は ズジンカでの分
析室・鉱石研究室の設置 トラクターによる機械的運搬
手段の実施 工作施設の建設などにみられるように 腰
をすえて進められた。

ウルバンツェフは まず 第1ノリリスク鉱床をとり
まく未調査部分の地質精査にとりかかった。そしてそ
の年の冬 ノリリスク台地北東斜面での調査の際 一つ
の重要な発見を行った。かつて 彼はその斜面で黄色
オーガが散在することを認めていたのだが それがノリ
リスク型硫化物鉱染鉱石の風化物であることを確認し
たのである。さらに剝土によって 1926年の春 緩傾斜
階段状に分布する鉱染鉱体を発見した。試錐の結果は
厚さ約200m 下盤際は1m 緻密鉱がポケット状に連続
している。彼は この鉱床に第2ノリリスク鉱床の名
を与えた。それは第1ノリリスク鉱床の東北東約6km

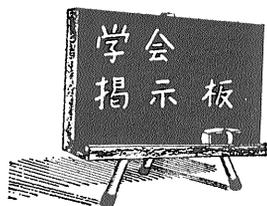
のところであった。このとき そのまた南約9kmのチ
ョールナヤ山に 北約4kmのデウゴルバヤ山に 北西約
18km のマルクシェイデルスカヤ山に銅・ニッケル鉱床
が眠っていることは 誰一人知る由もなかった。とも
あれ ジェルジンスキー最高国民経済会議議長の英断は
功を奏したのである。

1926年の夏 地質委員会委員長A. K. ギドビウスはノ
リリスク鉱床群の開発か否かを定めるため「実地検証」
に乗りこんだ。

そして 年間出鉱量17,000 t 計画がうち出されるにい
たった。数字はともかく ノリリスク鉱床は陽の目を
みることになったのである。この方向が定まった1927
年以降 正式に鉱山として探鉱が始まるまで 実際の探
査を指導したのは A. Ye. ボロンツォフで ウルバンツ
ェフはもっぱらノリリスク外周とタイムイル半島 さら
にセベルナヤ ゼムリャーの島々の調査に従事し レー
ニン勲章(1932年)など数々の表彰を受けている。

ウルバンツェフはレニングラードで余生を元気に送っ
ているようだ。最近の彼の写真は 優しい好々爺を写
し出している。しかし 荒々しいまでに冒険好きな若
き日のウルバンツェフは 私に少年の日の夢を思い出さ
せてくれて なつかしい。

(筆者は鉱床部)



065 札幌市北区北十条西八丁目
北海道大学理学部地鉱教室内 電話(011)-711-2111

・日本地質学会

1. 昭和49年9月1日
(日)~3日(火)
2. 日本地質学会第81年
総会ならびに学術大
会
3. 北海道大学
4. 日本地質学会
5. 日本地質学会第81年
総会準備委員会

5. 東北大学理学部地球物理学教室海洋物理学研究室内
980 仙台市青葉 電話(0222)-27-6200 内線3255

・日本地学教育学会

1. 昭和49年7月30日(火)~8月2日(金)
2. 日本地学教育学会第28回全国大会
3. 千葉県教育会館(千葉市千葉中央4丁目13-10) ☎280
電話(0472)-27-6141)
4. 日本地学教育学会
東京都小金井市貫井北町4丁目 ☎184
東京学芸大学地学教室内 日本地学教育学会
電話(0423)-21-1741 内345

巡 検

- ・第4回海外巡検
- ・日 時 昭和49年8月5日(月)~8月24日(土)
- ・申込〆切 昭和49年5月5日
- ・目的地—カナダ(ロッキー山脈 モントリオール周辺)
米 国(ワシントン アリゾナ グランドキャニ
オン)
- ・問合先—日本地学教育学会
☎184 東京都小金井市貫井北町4丁目
東京学芸大学地学教室内

電話(0423)-21-1741 内345

・日本鉱物学会・日本鉱山地質学会・日本岩石鉱物鉱床学会

1. 昭和49年10月14日(月)~17日(木)
2. 日本鉱物学会・日本鉱山地質学会・日本岩石鉱物鉱床学会
秋季連合学術講演会
3. 山口大学工学部本館(755 宇部市常盤台)
4. 日本鉱物学会・日本鉱山地質学会・日本岩石鉱物鉱床学会
5. 山口大学工学部資源工学科 島 敏史
755 宇部市常盤台 電話(0836)-31-5100

・日本海洋学会

1. 昭和49年10月27日(日)~11月1日(金)
2. 昭和49年度日本海洋学会秋季大会
3. 仙台市民会館
4. 日本海洋学会

[注] 1. 開催年月 2. 会合名 3. 会場 4. 主催者
5. 連絡先(掲載順位は原稿到着順)